

スイス、スペイン、アメリカの教育を視察して ・・・附属学校等教官海外教育事情視察派遣団に参加して・・・

田 中 裕 巳

ローザンヌ（スイス）、サラマンカ（スペイン）、マイアミ（アメリカ）の3都市を中心視察地とする平成7年度国立大学・学部附属学校等教官海外教育事情視察派遣団に参加させていただいた。本校では平成5年に参加された高須先生以来である。10月31日に成田を発ち、11月24日に成田に戻る25日間、西周りの地球一周の旅であった。11月初旬に訪れたローザンヌでは初雪に遭遇し、一方、11月中旬のマイアミは夏のバカンスの余韻がまだ残っていた。3つの国の気候、風土、民族性の違いを体感できた。

研究担当運営委員という立場にもかかわらず、しかも文部省の研究開発指定校の委嘱を受けた第1年次であり、11月2日には本校の中等教育研究協議会があるという、大変な時期に送り出していただいた田畑校長をはじめ教職員の皆さんに心から感謝しなければならない。

上記の3都市では、いずれも2日間にわたって、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、障害児（者）教育施設を見学して回った。それぞれ見学のはじめには、教育委員会等の教育行政担当者から、国および県または郡の教育制度のレクチャーがあった。それぞれの学校では教職員、児童・生徒の熱烈な歓迎を受けた。教育行政担当者によるレクチャーの内容と、訪問した学校の簡単な紹介と印象を記して、研修報告としたい。

スイスの教育・・・文化の多様性と外国人の子弟の教育

チューリヒからバスでベルン経由、ローザンヌ入りしたのは11月1日であった。レマン湖北岸のローザンヌは、ボー州の州都であり、人口は12万人。我々の宿泊したホテルの近くにIOCの本部があった。ローザンヌは坂の多い美しい街であった。

11月2日はまず、午前9時に、**ボー州教材支給事務所**を訪れた。ボー州産業省公立教育・宗教部総務次長ペレ（Pellet）さんのボー州の教育制度についてのレクチャーを受けた。以下はその概略である。

・カントン（州）の自治

ボー州は、3,219km²（鳥取県より少し小さい）、人口

は57万人。フランス語圏にあり、スイス全体がそうであるように州政府が強い自治権をもっているが、市町村を単位とするゲマインデ（共同体）の権限も尊重され、住民自治の原則が生きている。

・ボー州の教育制度

1970年の教育に関する州間協定（コンコルダ）により、スイス連邦全体の教育制度は次のようになっている。

- ①義務教育就学年令を満6歳とする。
- ②義務教育修業年限を9年間とする。
- ③義務教育就学年令より大学入学資格取得までの就学年数を12～13年とする。
- ④新学期開始は毎年8月中旬から10月中旬までの時期とする。
- ⑤男女共学を原則とする など。

ボー州でも小学校は4年制で、中学校が5年制。中学1年（日本の小5）の段階がオリエンテーションと呼ばれ、中学2年からのコース振り分けのための準備期間とされている。中学2年から、大学進学をめざすコース（DP）、資格取得をめざすコース（DS）、卒業して技能職人となるコース（DT）に分けられる。人数はほぼ3分の1ずつである。DPは、中学2年からさらにL（ラテン語専攻）、C（理工系専攻）、D（語学系専攻）、E（経済系専攻）のコースに細分される。DSは中学4年（日本の中2）からLi（文学専攻）、Te（科学専攻）、Co（商業専攻）のコースに分けられる。DTは高校進学という点では、一見、袋小路であるが、DTコース修了者のためのRaccordement（コース変更のための準備クラス、1年）が設けられており、ここを終えて高等学校へ進学することができる。

高等学校へ進む生徒は50%であり、私立学校は5%で公立が主流である。大学へは22%が進学し、ローザンヌにはローザンヌ大学とローザンヌ工科大学がある。希望者は全員入学できるが、2年次への進級が厳しい。

・ボー州の教育制度の課題

小学校にも留年があり現在は各学年で行なわれているが、留年の判断を2年生と4年生に制限して、子ど

もたちが落ち着いて勉強できるようにする方向である。

中学1年（日本の小5）でのオリエンテーションには批判もあるため、1年遅らせることを検討している。



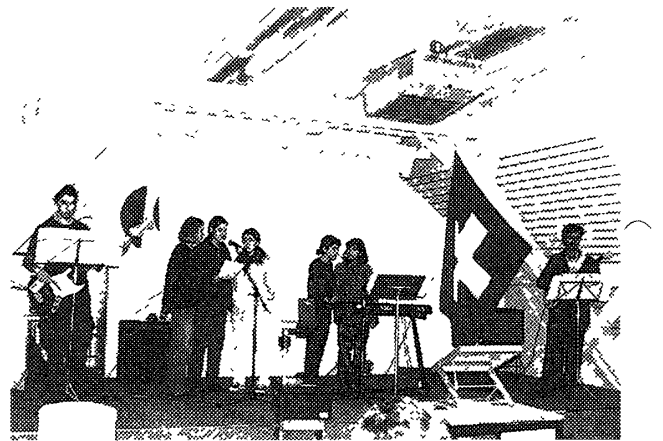
【ハール小学校の子どもたち】

この日の午後は、幼稚園と小学校の併設された**バール小学校** (Ecole de La Barrg) を見学した。生徒数240名、教員10名（幼稚園3、小学校7）のこじんまりとした学校であった。まず、この小学校の2年生の子どもたちが発表したミュージカル「Lili」の一部を、10分間程合唱してくれたが、子どもたちの民族的多様性に驚いた。黒い肌をした子ども、東欧系の顔つきの子ともなどが入り交じっている。ユーゴやポルトガルの子ともが多いということであった。

授業は、算数の集合、理科の磁力、音楽のリズムの授業などを見学したが、1学級の生徒数の少なさ（23～24名）、グループ学習や個別学習が多いこと、教師の着衣の自由さ（理科の授業の男性教員はバリ島のTシャツを着ていた）などが印象に残った。

見学後の懇談会では、外国人子弟に対するフランス語教育、外国人の保護者に多くある子どもの教育に対する関心の低下、教員の給与（小学校経験15年の教員で月650SF、70万円程度）などが話題となった。

11月3日、午前中は2つのグループに別れて、ベージュ中学校 (Ecole de Bethusy) とポリュー高等学校 (Centre Deseignement Secondaire Superieur de Beaulieu)、午後は全員でカッサーニ学校 (Institution de la Cassagne Foundation Comb) を見学した。午前中、私はポリュー高等学校のグループであったので、同高等学校とカッサーニ学校のことを紹介することとする。



【ポリュー高等学校 歓迎のバンド演奏】

ポリュー高等学校は、創立1869年という伝統ある商業高校を母体とし、1991年にギムナジウムとなった高等学校である。1915年に建築されたという校舎は、階段、廊下等広々とした歴史的建築物であり、また一方、ここ数年で行なわれた改修工事で、カラス張りのエレベーターなども設置され、伝統とモダンとの共存する威風堂々とした校舎であった。広い廊下に整然と置かれた頑丈そうな生徒用ロッカーが、この学校の豊かさを象徴しているように見えた。また、校舎の一週にカフェテリアがあり、一人の男子生徒（留年している○）が昼放課にビールを飲んでいる光景には、カルチャーショックを受けた。

校舎の見学をした後、エレベーターで5Fに上がり、集会室で6人の生徒と1人の先生によるハンドの演奏（イエスタディ他2曲）を聴き、デュビュイ校長の「2国間の相互理解が必要だ。日本の情報をもっと得たい。」という歓迎の言葉をいただいた。その後その部屋で、英語と地理の授業を見学した。

英語は2年生普通科の生徒たちで、比較的若い女教師。“Clothes make the student”というアメリカの新聞記事をプリントして配布し、制服をめぐるディベートであった。当校の自由な服装の生徒たちは、もちろん制服反対の声がほとんどであったが、英語で討論するという点に意義があるのだろう。日本の高校2年生よりはかなり会話力があると感じた。

地理は2年生商業科の生徒たちで、教師は50代（？）の男性。生徒数は19人で、うち13人の女子が前の方に、6人の男子が後の方に、棲み分けして座ったのには興味をそそられた。指定席ではなかったにもかかわらず。国土の利用、農業問題が主題で、「農民になりたい人は？」という問いにYESという反応はなかった。「なりたくない理由は？」に対して、女の子たちから「農民のイメージが悪い」「他人との接触が少ない」「レジャーが少ない」などの答えがあった。

農地が全国土の26%を占めるスイスでも、若者の農業ばなれは深刻のようだ。授業後半は、ビデオを見ながら農業改革、農地の集合化、防風林の撤去による荒地化・土壌流失などの問題が取り扱われていた。ビデオの調子が悪く、同じ社会科の(?)少し若い教師が修理に駆け付けたのが、何となく微笑ましい光景であった。

午後を訪れた**カッサー二学校**は財団による経営で、障害児学校、コンピュータ作業所などの施設から成っていた。障害児学校では校長が不在で、ペーター夫人(副校長)の説明を受けた。

出産時の酸欠、筋ジストロフィー、交通事故などによる重度障害児の子ども(幼稚園から18歳まで)60名が在席し、うち30名は寄宿生活をしている。教職員は100名で、養療・治療を行なっている。セラピーは3つの領域があり、フィジオ・セラピー(リハビリテーション)、ロゴ・セラピー(摂食、言語、よだれなどの口のコントロール)、エアゴ・セラピー(手や体の動かし方、意志交換訓練)が週に12時間。大学まですすむ生徒も少数いる。就職は障害者の工場などが多いが、卒園者の工場が校内にもある。

説明の後、コンピュータを使った学習(数や種類に関するソフトを使ったり、簡単なコンピュータグラフィックを行なっていた)を見学したが、10人程度の教室で一人一台が使用されていた。実習生が来ているということであったが、職員の数が多いことに感心した。

スイスの教育全体については、5年生(11歳)でのオリエンテーションに象徴されるように、早期のコース分け・選別というヨーロッパの公教育の保守的な伝統がまだ生きているということを感じた。中学校段階でも、大学進学のためのDPコースには、まだラテン語が位置づけられているというあたりも、グラマースクールやリセの影響があるのだろう。



【レマン湖のほとりのルソー像】

チューリヒではペスタロッチの銅像を見た。この後、ジュネーブでレマン湖のほとりに立つルソーの銅像をみた。ローザンヌの教育関係者の口から、いずれの名前もでてこなかったが、ペスタロッチもルソーも現代スイスの公教育の思想には無縁なのであろうか。外国人労働者・難民の流入の激しいスイスの現在において、ルソーの「今や守るべき祖国はない」という人間教育への志向は真剣にとらえ直されるべきだと思う。ジュネーブでの自由行動の日、私は一人だけ、モンブラン行きの本隊と離れて別行動をとった。下調べをしてきたわけではないが、ルソー・カレッジをぜひ訪れてみたかったからである。国連本部に比較的近いルソー・カレッジは、すでに廃墟となっていた。学生の残した落書などを見ながら、移転したのか、廃校になったのかなど、無人のキャンパスでしばし思いをめぐらしていた。

スペインの教育・・・教育における近代と現代

パリのオルリー空港を発ち、マドリードに着いたのは11月8日の昼すぎであった。1時15分バスが発発し、マドリード北西のサラマンカに到着したのは4時。マドリードーサラマンカ間は約200kmというところか。サラマンカは人口37万人(81)、サラマンカ州の州都である。ホテルの部屋の窓を開けると異様な匂いが漂ってきたが、近くに砂糖大根の精糖工場があるとのこと。化学などの工業も発展しているが、もともとイスラム学術やルネサンスの中心地で、サラマンカ大学は1212年頃、アルフォンソ9世により創設されたそう。そのサラマンカ大学の近くにマイヨール広場があり、皮製品のお店、飲食店(バー)、お土産店などが集中し、買物、昼食や夜の集い(?)でお世話になった。

サラマンカでの視察第1日目の11月9日午前中は、市の商工会議所会議室にて、**県教育長ソレル(Juan Soler)氏のレクチャー**を受けた。以下はその概要である。

・スペインの教育制度

1975年にフランコ独裁体制が終焉し、78年に憲法が制定された。第27条に教育を受ける権利が規定され、LODEと呼ばれる旧教育制度が出来上がった。1990年に成立した教育制度総合整備法(LOGSE)では、教育への権利をうたっている。現在、新教育制度への移行過程にあり、1998年に完了予定である。義務教育は2年延長されて10年間となる。

小学校6年、中学校4年が義務教育、無償である。後期中等教育の2年はバチレラートという専門分化の課程で、自然科学・人文社会科学・技術・健康保健

の4コースを持っているものがARTESと呼ばれ、サラマンカには一校のみである。文科系と理科系の2つのコースの学校が多い。後期中等教育には職業専門校もある。

・新教育制度の課題

職業専門校は、社会が望むような人材を育成する必要がある、社会の急速な変化に対応できる教育をする必要がある。基礎的な学習、企業研修、木工等の専門職業教育を結びつけてゆかねばならない。

コース変更についても、職業専門校に進んだ生徒は、バチリエラートに入り直すか、社会人として経験を積んで専科大学で資格を得る道がある。

この日の午後は、と言ってもシェスタの後なので、3時45分から**トルメス小学校・幼稚園**（C P LAZARILLO de TORMES）を訪問した。

この学校は幼・小含めて、生徒数457名、教員数30名（男7、女23）。市の中心部から少し離れているため、生徒たちの約半数は6台の通学バスで通っており、給食を受けている。他の子どもたちは、1時15分から2時間、昼食のために家に帰る。先生の多くも昼食時は帰宅するため、給食とその後の休憩時間は、国が契約した9人のモニターと2人の実習の高校生が面倒を見ている。

教科書の選択は担任教員が行なう。教科書代は本人負担で、デパートで購入することになっている。

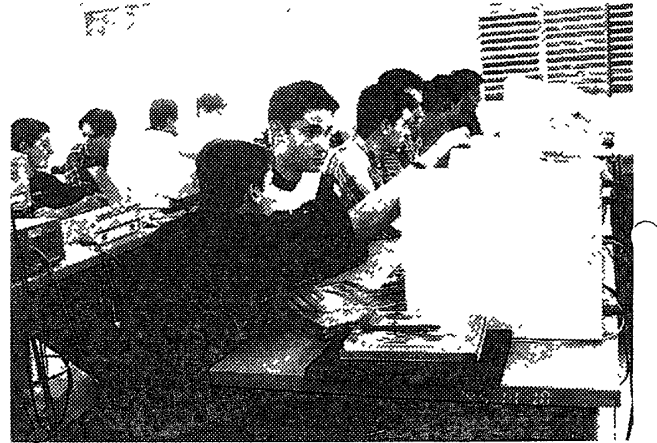
生徒構成は多様で、モロッコ、ポルトガル、ジブシーの子ともなど国際性に富んでいる。スペイン語をまだ喋れない生徒（モロッコ人2人、ポルトガル人1人、ジブシー30人）をピック・アップして教えている。

新教育制度の導入によって、学級定員は1学級40人から25人となった。外国語（英語）は3年生から特別専科教員によって教えている。音楽も教えられるようになった。宗教の時間は、カトリックか道徳の選択となった。

総合学習は、1年～6年まで週3時間あり、理科＋歴史・地理の内容で、高学年になるほど、実証性とフィールド・ワークを重視している。たとえば住んでいる地域の調査や生活全体のグローバルな認識がめざされている。

なおこの日午前中の県教育長とのミーティングは、地元の新報の翌日の朝刊に、写真入りで大きく取り上げられていた。

翌11月10日は、午前中にフェデリコ・ガルシア・ベナルト中・高等学校（C P Federico Garcia Bernalto）、午後にはソフィア王女養護学校（C P Reina Sofia）の2校を視察した。



【ベナルト中・高等学校にて コンピュータの授業】

ベナルト中・高等学校では、まず事務局・カウンセリング棟、理科実験室、コンピュータ・ルーム、生物・地学室、製図室、人文系教室、音楽教室、美術室、図書館などを見学。コンピュータ・ルームの機種は、Fpson、Ohvetti、Casper、Tandonなど多種にわたり20数台が入っていた。人文系教室では、数学の授業が行なわれていたが、昨日の小学校の教室では正面に十字架がかかげられていたのに対して、ここではそれが無いことに気が付いた。

この学校はもともとは職業高校だったそうだが、現在は生徒総数940人のうち、700人がバチリエラート、残り240人が職業専門コース。職業専門コース2年生のコンピュータの授業も見学したが、男子のみのクラスで14台のコンピュータをそれぞれ2～3人で使用していた。

見学の後、マッチョ（Juan Manuel Macho）校長から次のような説明、応答を受けた。

「この学校の特色は、バチリエラートに行く生徒も就職する生徒もいるという多様な生徒構成、コンピュータを利用した教育、学校生活が実生活に役立つことにある。

教育改革にあたって、生徒の学習における積極的態度の重視、そのための教科書づくりを行なっている。義務教育が、14歳から16歳までに延長されて、進路決定が充分時間をかけて行なえるようになった。

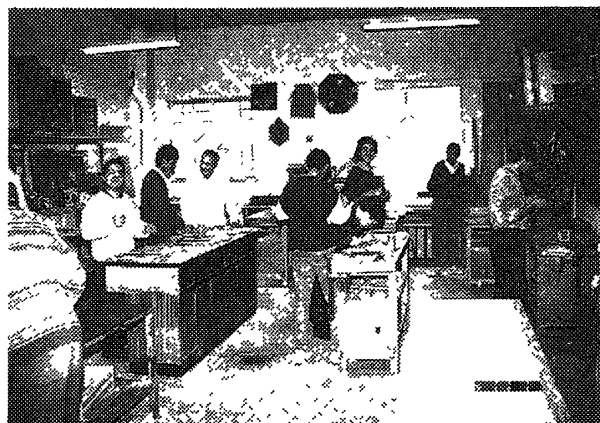
本校ではバチリエラートの80%、全体の40%が大学へ進学するが、大学入試のための補習などはしない。落第する生徒は高2で30%ほどいる。

評価は多面的な評価を重視し、継続的な評価も行なっている。

不登校、いじめは、昔は多かったが、新教育制度の効果はまだこれから。」



【ソフィア王女養護学校にて コンピュータ・ルーム】



【同 木工室の男子生徒たち】

シエスタの後、3時30分にバスがホテルを出ると、数分で午後からの訪問施設ソフィア王女養護学校に到着。ホテルから直線で1キロも離れていない所であったようだ。教育科学省とサラマンカ県教委との提携により設立されたサラマンカ県唯一の公立養護学校で、学校と寄宿舎からなり生徒数は170名。校長は県会議員、市会議員を兼ね多忙につき不在。教務主任(Martin 先生)の説明を受ける。

「6歳から19歳までの、視力、肢体不自由、性格など様々な障害をもった子どもが収容されている。75名が寄宿舎に入っており、金曜日には(この日は金曜日であった)ほとんどの子どもが家に帰る。

教師は、教育心理学、言語学、物理療法、カウンセリング、心理学などを学んだ専門家38名とその他の職員25名から成っている。

午前中は工場見学も多い。労働省と協約で企業にも援助金が支出される。実社会への参加が目的である。」

説明の後、コンピュータ・ルーム、リハビリ・ルーム、家庭科室、作業ルーム、給食室、寄宿舎などを見学した。コンピュータ・ルームでは、7人の子どもが7台のコンピュータで、それぞれ別々のプログラムで

課題学習に取り組んでいた。家庭科室では、16~18歳の女子生徒たちが、縫い物をしていた。かなりの出来ばえの作品も多かった。異国の訪問者多数に興奮したのか、キーキー声を上げている女の子が印象に残った。作業ルームは別棟で、木工、パイプ、陶芸を男子、製本を男女が学んでいた。家庭科室もそうであったが、子どもたちの4割くらいはダウン症という印象を受けた。木工は精密な寄木細工で、自分の作品を自慢げに見せる生徒がいたが、本当にすばらしい作品だった。製本の部屋では、古書の再生に取り組んでいた。糸綴じ本の再生であるが、1ページ1ページはがしたり、また、針と糸で綴じるといった根気のいる作業に黙々と取り組んでいた。製本所への就職率などはよいとのこと。生徒が帰省したため、がらんとした寄宿舎を見学して、サラマンカでの見学は終了した。

マドリードのホテルの近くにドン・キホーテの像があった。『ドン・キホーテ』の著者セルバンテスはサラマンカ大学で学んだそうだが、ドン・キホーテが来るべき近代への抵抗者であったとすれば、1939年から75年まで独裁政治を続けたフランコは、民主主義にも社会主義にも背を向け続けた現代への抵抗者と対比できるかもしれない。スペインの近代化は、ようやく20年前に始まったばかりなのだ。このことの重みを意識せずにスペインを訪れ、そして去ってしまったことが、悔やまれる。

ようやく近代憲法が成立し、教育を受ける権利が保障されたこと。宗教的中立性、信仰の自由が認められたこと。トルメス小学校の各教室正面にかかげられていた十字架がベナルト中・高等学校の教室からは消えていたことの意味。大半の親も教師もカトリックであることからくる多数者の威圧。あるいは自然の風土。高校教師や一部の生徒たちに、近代憲法の意義がより意識されているのかも知れないとも思った。

トルメス小学校で得た総合学習の情報も貴重であった。環境教育が中心ということであったが、6年間の環境教育の系統性、各教科とのかかわり方などもっと詳しく知りたい領域であった。

アメリカの教育・・・ナショナルとインターナショナルの混合

マドリードから空路マイアミに着いたのは11月14日のことであった。マドリード空港を11時30分離陸、マイアミ国際空港到着が3時30分。時差は7時間あるため、搭乗時間は11時間ということになる。500年前に、コロンブスがポルトガルを出て「新大陸」(現在のワットリングス島)を発見するには70日間を要したという。そのことを考えれば11時間は「あっ」という間なのだが、ヨーロッパからアメリカ大陸はやはり遠かつ

た。

サラマンカは北緯41度（青森あたり）、マイアミは北緯26度（那覇あたり）ということで、サラマンカには晩秋の気配があったが、マイアミではまだまだTシャツで充分。各教育施設の巡回をしたハスにもクーラーが入っていた。

マイアミでの視察は、11月16日からの2日間であった。16日午前中は、フロリダ州マイアミ市のあるデード郡 (DADE COUNTY) の教育委員会の訪問であった。8時30分から12時05分まで、ディアズ副教育長以下5人の部長によるレクチャーを受けた。

ディアズ副教育長自身もキューハからの移民だが、デード郡の教育の概観を次のように述べた。

「学校体系は、エレメンタリー・スクール（幼稚園から5年生）、ミドル・スクール（6～8年生）、ハイ・スクール（9～12年生）からなり、児童・生徒総数は32万人である。

生徒の人口構成は、50%がヒスパニック、34%が黒人、16%がその他の主に白人である。国籍は125カ国に及ぶ。入学時15%の児童・生徒が英語の会話能力がない。

常に移民問題を抱かえており、ハイチ、キューバ、ニカラグア、エルサルバドルからの移民が多いが、80年代後半からはロシアからの移民もある。80年代だけで、キューハから15,000人の生徒が移入してきた。」

マイアミ国際空港で出会った多くの人たち、タクシートの運転手、ホテルの前の駅から乗った Omni Loop の乗客たち、どこでもスペイン語が飛び交い、まさに“人種の坩堝”を実感させられた。

続いて、以下の5つのレクチャーを受けた。

- (1) パット・ポーハム女史「学校の経営管理」
- (2) ハーハラ・A・シルハー氏「能力別カリキュラムの展望」
- (3) ルイス・リントール氏「学校改善・支援サービス」
- (4) ヘンリー・フェレル氏「数学・科学教育の改善」
- (5) フィリス・ホールハーク女史「カイダンスとカウンセリング」

印象に残った事項を列挙しておく。() 内の番号は、上のレクチャーの番号に対応している。

- 校長による勤務評定 TADS (Teacher Assessment and Development System) が実施されている。新任教師は1年に4回視察を受け、新任研修プログラムを修了してから1年契約を結ぶ。(1)
- 州法によって、各学校には学校諮問委員会 (School Advisory Committee) が置かれており、管理者、教師、保護者、地域代表から構成されている。学校計

画が諮問されている。(1)

- 学校管理が州政府から地方議会の権限にシフトされ、学年編成の多様化、教育方法の改善、カリキュラム内容の改訂が追求されている。能力別カリキュラム CBC (Competency-Based Curriculum) のユニークな点は、教師によって書かれたこと、思考能力を高めることを強調していること、水準を上げようとしていること、個々の教授方法を提供すること、オールターナティブな評価技術を促進すること、すべての必要なものを一カ所に集めること、各教科の真に重要なものを明確にしていることである。(2)
- 校長も教師も先ず Generalist (普遍人) でなければならない。専門科目を教えるだけでなく、幅広い教師像が求められる。「How big is your world?」というような総合学習も行なわれている。(3)
- 数学の学習と他教科のトピックス、日常生活への実際的な応用とを結びつけることが大事である。数学の現実生活との結合・応用は、動機づけとなり、学習の意味をあたえ、学習を強化することになる。(4)
- 各学校にはカウンセラーが配置されている。生徒の学習、生活状況などの問題に専門的にカウンセリングを行なっている。(5)

5人の各部長の話は、最後の2人にはあまり時間が残されておらず、顔見せ程度になってしまった。我々の研究発表会などでも同様な現象になってしまうことを思い出し、同情しきり。ホテルに戻り短い昼食の後、1時に午後の訪問校へバスで向かった。

リビエラ・ミドル・スクール (Riviera Middle School) では校長は不存で、クーパー先生 (Ms Cooper) が説明と案内をしてくれた。

「生徒総数は1,450人で、そのうち400人ほどが、特殊学級である。特殊学級には、軽度から重度の知的障害、身体障害、優秀児 (gifted) が在席し、特別なプログラムによる教育を受けている。障害児のグループは12で、うち6グループは健常児との統合教育を受けている。学級定員は最小が6名、最大が20名である。12年生をここで終えて高校卒の資格を得る生徒もいる。」

以上の説明の後、家庭科、体育、重度障害のワークショップ・クラス、コンピュータの授業を見学した。家庭科室では縫い物、ハウス・キーピングの授業中で、20人の生徒に対して、9人の教師、言語指導士、療養士がティーム・ティーチングを行っていた。自立や労働習慣の獲得が目指されているようだ。ワークショップ・クラスでも教師とアシスタントの計4名で、ティッシュやストローの箱詰めの作業が行なわれていた。コンピュータ・ルームにはマックが28台設置され、全員一台ずつ使用していた。見学の後で質疑

応答の主な点は次の通りであった。

- 通学区域はどうなっているのか? ←一般論としては健常児と同じ。地域を越えてきている場合もある。排泄の世話がある、呼吸困難の生徒などもいる。
- この学校に入学できない生徒もいるか? ←入学希望者を拒否することはできない。障害の程度、人種等にかかわらず。どのクラスに入れるかは両親と相談して決める。
- グループでの授業、訓練が多かったが、個別学習、指導はどうなっているのか? ←アシスタントによる個別指導がある。児童ごとに個別化されたカリキュラムが作られている。
- 統合教育の意義について? ←本校では健常児と一緒に授業をすることを方針としている。双方にとって意義があると考えから。郡内には分離の学校もあり、障害が強度の場合、分離の学校への入学を勧める場合もある。
- 卒業後の進路について? ←大半が高校へ進学する。障害児の就職指導専門教師がいる。学習困難の生徒の大半はカレッジか職業専門校へ進む。

マイアミでの視察2日目(11月17日)の予定は、午前中にサウス・ハイアリア幼小学校、サウス・マイアミ高等学校、午後にはシトラス・グローブ中学校の3校の訪問であった。



【サウス・ハイアリア幼小学校にて】

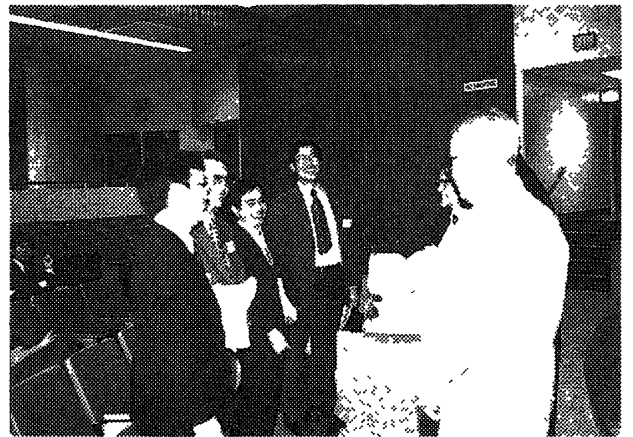
サウス・ハイアリア幼小学校 (South Hialeah Elementary School) では、8時30分からの朝礼で始まった。図書室に放送設備も併設され、そこから宣誓、国歌斉唱、校歌斉唱、学校目標の朗読の場面が各教室に放映されていたようだ。この朝礼の後、教職員手作りの朝食をいただきながら、若く美しいハリスン校長 (Ms Marie Harrison) による学校説明を受けた。

「本校は創立70年で、現在補修中である。幼児・児童数は1,300人、教職員は109名(校長を除く)で、デ

ード郡のモデルスクールとなっている。クラスはnoisy だがcreativeである。今月の学校の勉強のテーマは、「生物と無生物」です。

本校にはコミュニケーション・スクールもあり、放課後および6時以降の保育、夜間の成人教育、英語教育が行われている。」

説明の後、6つのグループに別れて、授業見学を行った。小学校の日課は、国語2、リーディング1、算数1、ライティング0.5、総合学習1となっていた。



【サウス・マイアミ高校にて 答礼】

サウス・ハイアリアに2時間ほど滞在して、11時にサウス・マイアミ高等学校 (South Miami Senior High School) にバスで到着。ショー校長 (Mr Thomas Shaw) が出迎えてくれたが、事前の連絡を受けていないので、授業参観はできないとのこと。今回の視察旅行では初めてのケースだ。特別教室(前面に舞台があり、扇型のスロープ状になっている。200名程度収容か)で、この学校の日本語教師(中国人)による通訳でレクチャーが始まった。

「この学校は生徒総数2,500名で、4年制で、98%が普通科、2%が工業他の生徒構成である。学校予算は固定資産税で、州よりデード郡へ交付されている。

学校では校長の権限が強く、採用、給与についての決定権は校長にある。給与は10カ月ベースで、平均6~8万ドルである。レイオフがなく安全な職業である。」

校長は、人事、教育内容についても決定権を持っており、組合との協定により、7時間労働、専門教科だけを教えること、給与体系などについて組合と合意している。

学校の特色としては、行儀、しつけを重視している。他の高校では50%がドロップアウトするところもあるが、本校では10%程度である。生徒を引き付けるマグネット・プロジェクトとして、音楽・芸術の教育

に力を入れている。外国語はフランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、日本語を選択できる。

校内でのカンの所持は、2年間に一回だけあった。

この学校の自慢できることは、コミュニケーション・スキル、TVプロダクション、コンピュータ・グラフィクス、大学との提携などである。」

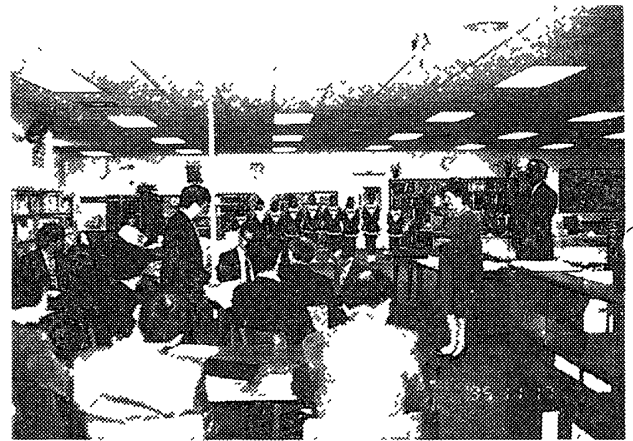
ショー校長のレクチャーの後、校内施設の見学をしたが、各フロアの要所要所にセキュリティーが立っていた。校長の話にあったように、教師は「専門教科だけを教える」という点からすれば、授業の前後や放課後の生徒指導は、教師の仕事ではないということになる。たしかに日本の学校でも、同様の時間帯や教師の居ない空間が発生する場合は多い。そういう時に起こりやすい学校事故も教師の最終責任が問われる。教師は「専門教科だけを教える」という教師論は、日本の高校では成立しないと思うが、日本の学校でも教師のパートナーとして、セキュリティーは必要だと思った。職員会議や教員朝礼、放課時間などで教師のいない時間、空間があり得ることを承知で、生徒を放りばなしにしているのは、行政の怠慢である。いじめ問題の解決の一つの方法は、セキュリティーの配置だともいえる。セキュリティーの配置が、生徒たちにとって息苦しいものとなることは警戒しなければならないが。

校内施設では、TVスタジオの充実に驚かされた。撮影、照明、編集等の技術をここで学び、大学の放送学科などに進む生徒も多いとのこと。

この高校では結局授業参観はかなわなかったのであるが、校長のレクチャーの通訳をめぐるトラブルが忘れがたい印象である。レクチャーの通訳は中国人の日本語教師によって行なわれたが、私たちの団にはマイアミではOさんという、もちろん日本人の通訳がついており、その場にも同席していた。彼がその日本語教師の通訳に補足を入れたり訂正したりしたため、日本語教師の怒りが爆発。「通訳は私のはずです!」。「専門教科だけを教える」高校教師のプライドが、しかも校長の面前で傷つけられたのだから、その日本語教師が怒りだすのは無理もない話であった。

午後は今回の視察旅行の最後の訪問校、シトラス・グローブ中学校 (Citrus Grove Middle school) を訪れた。バスが到着すると、ライネケ校長 (Ms Janice Reineke) を始め多くの教職員とチアガールの生徒たち10名余りが出迎えてくれた。開架式の図書室に通され、そこでまずライネケ校長から、学校の概要について簡単な説明を受けた。

「生徒数は1,427名で、うち147名の障害児、非英語圏からの生徒185名をかかえている。コンピュータによる時間割作成、出欠、成績管理を行っている。各ク



【シトラス・グローブ中学校図書室にて】



【総合学習の授業 個別学習の生徒もいる】

ラスにもコンピュータがおかれ、インターネットにも接続されている。ただしホームページは目下、作成中です」

以上の説明の後、養護学校教員のグループ、理数系教員のグループ、その他の教員のグループの3つに分かれて見学をした。私が参加した第3グループは、TTによる授業、理科の電流の実験、美術のデザイン、総合学習、音楽の授業を見学した。TTによる授業は、ここも総合学習ということであったが、それぞれが調べ学習の最中で、全体としてのテーマなどは不明のままであった。総合学習では、タイタニック号の沈没の際のアメリカとロシアの協力関係が触れられ、「Every people is equal」という言葉が黒板に書かれていた。ディスカッションが中心のようであった。音楽はたまたま自習ということで、他教科の先生が監督していた。半分くらいの生徒が、ビデオで『市民ケーン』を鑑賞していたが、他の生徒たちはおしゃべり。

見学のあと再び図書室に戻り、次のような質疑応答が行われた。

・自習時間の監督はどうなっているのか←自習でも必ず成人が付いていることが規則となっている。自主活

動でも同様。

- 多民族、多様な生徒構成だが、教師の授業以外でのかわり方は←予算の裏付け次第だが、例えば10月を“スペインの月”とかして、興味を喚起している。

- 非英語圏の生徒に対しての英語の指導は←特別クラスを設置したり、数学、社会などはネイティブ・スピーカーの先生による授業をしたりしている。

- 原級留置の措置はどうなっているのか←3%程度の生徒がついていけない。6科目中5科目が合格していれば進級を認め、7限目をしたり、夏休み中に補習をしたり、年度中に宿題を出したりしている。卒業時までに修得させるが、そのまま高校に進学してしまう場合もある。ミドル・スクールはハイ・スクールよりもある意味では問題は深刻です。

シトラス・グローブ中学校では、プロフィール、スケジュール、ビジネス・レポートなどのファイル(A)と生徒用のスチューデント・アサインメント・ブック〔学習の手引き〕(B)の2冊のファイルをお土産にいただいた。

ファイル(A)によると、生徒構成は、90%がヒスパニック、7%がノン・ヒスパニックの黒人、3%がノン・ヒスパニックの白人である。校長(ノン・ヒスパニックの白人)を除くフルタイムの教職員78人の構成は、44%がヒスパニック、22%がノン・ヒスパニックの黒人、34%がノン・ヒスパニックの白人となっている。新任教師の割合は15.4%、教員52人の平均給与は36,338ドル。新任教師が多いためか、最も低い26,500ドルから29,999ドルの枠が最も多く21名、最も高い42,000ドル以上が19名で、その間は12名のみ。中堅層が少ないということなのだろう。サウス・マイアミ高校の教員の平均給与が6~8万ドルということであったから、ミドル・スクールの教員の給与はかなり低いといえる。

例外的な子ども(EXCEPTIONAL STUDENT)と分類されているのは、1994-95年の統計であるが、合計で190名、いちばん多いのが学習困難児(SPECIFIC LEARNING DISABILITY)118名、次いで、優秀児(GIFTED)35名、身体的な障害児14名、言語障害児(LANGUAGE THERAPY)12名となっている。

ファイル(B)は興味深く読んだ。アサインメントとあるから、生徒が毎日記入して、先生に毎日か毎週にでも見せるものなのかもしれない。1年間の学習計画、教科ごとのテストの結果等を記入する欄、各教科の学習内容、毎日の学習についての反省・親や教師のコメント(以上が大半を占める)といった内容であるから、先に示したとおり〔学習の手引き〕とか〔学習の記録〕といえよう。アメリカの教育は、学校は学

校、家庭の教育は家庭に任せるという先入観を持っていたものからすれば、随分と学校と家庭との連携が密であると思った。あるいは、アメリカにおける家庭の崩壊がレポートされる中で、こどもの「教育を受ける権利」をこういう形で学校が確保して行かなければ、こどもの教育そのものが成り立たない、ということなのかもしれない。

ファイル(B)が、〔学習の手引き〕的だというのは、このファイルには、校則らしきものが記載されているからである。ファイルの前の方に“スクール・インフォメーション”というページ(全5ページ)とデード郡公立中等学校生徒規則(1ページ)が掲載されている。

スクール・インフォメーションのページには、出席・欠席、スクール・カフェテリア、ガイダンス、生徒会などのことがABC順に規定されている。

CONDUCTの項には、「生徒は、すべての生徒、シトラス・グローブの全スタッフに対して、礼儀正しく、きちんとした態度であるまうことを期待される。生徒は、すべての学校およびデード郡教育委員会の規則に従うことを期待される。」とある。

DRESS AND APPEARANCEの項には、「重い木底靴(clog)、パタパタなる履き物、半ズボン、帽子、タンク・トップ、タイト・スカート、ミニ・スカート、だぶだぶズボン」は禁止とある。また「下着が見えたり、お腹を見せたりはいけない」、「性的な内容、タバコ、ドラッグ、酒などを表すスローガン、絵などのついた衣服もだめ」と結構、具体的で細かな規定がある。自由の国も、まったく自由な学校文化ではないというわけである。

LOCKERの項では、「割り当てられたロッカーは学校の財産であって、生徒のものではありません。正しい目的のためだけに使用することができます。学校当局は、何らかの合理的な目的のために、ロッカーを開いて中身を調べる権利があります。」とあり、本校でもこういう規定が必要かもしれない。

PROHIBITED ITEMSの項では、「ラジオ、カメラ、リモコンの時計、ウォーク・マン、ビデオ・ゲーム、ポケ・ベル beepers)が学校に持って来てはいけないもの、「没収されるもの」とされている。ポケ・ベルについての規定は参考になる。

デード郡公立中等学校生徒規則では、生徒指導の原則が定められている。

例えば、違反行為のグループ1は、普通の破壊的行為、挑発的な言葉の使用で、一度目の違反が、懲戒処分(Recommended Disciplinary Actions)のプランA、二度目がプランBの対象とされる。プランAは、両親との会合、管理者・教師・生徒の会合、クラス内、

学校内での懲戒処分、プランBは、両親との会合、管理者・教師・生徒の会合に続いて、適当ならばクラスからの分離、適当な法的活動のためにスクール・セキュリティか警察への委託、適当なときには、賠償が原状回復。

違反行為のグループ2は、暴行、学校教職員当局の無視、スクール・バス内での騒動、賭事、嫌がらせ、下品な言葉、わいせつな用具、小額の窃盗、性的嫌がらせ、タバコの喫煙。

違反行為のグループ3は、ケンカ、非合法組織、文化財の破壊。

違反行為のグループ4は、教職員への暴行、殴打（生徒同士）、ゆすり、多額の窃盗、精神緩和剤や不法なドラッグの所持、盗み、精神緩和剤の使用。

違反行為のグループ5は、放火、悪質な暴行または殴打、教職員に対する殴打、継続的な騒動行為、礼拝堂の冒瀆、武器の所持または隠匿、精神緩和剤または不法なドラッグの所持・販売・分配、性的な違法行為。

違反行為のグループ6は、凶悪な暴行、凶悪な殴打、火器の所持・隠匿。

日本でも起こっても不思議ではないグループ4の違反は、プランDによる処罰とされている。プランDは、両親との会合、管理者と生徒との会合、停学10日、除名勧告、オポチュニティー・スクール（更生施設？）ないしは懲罰的なプログラムへの配置。

シトラス・グローブ中学校の〔学習の手引き〕にこだわり過ぎたかもしれない。以上に紹介したような規則・校則が、マイアミ独自のものなのか、アメリカでは一般的なものなのか、そこまでは判断する材料を得ることは出来なかった。しかしながら、予想以上に細かな規則・校則が多いことは、アメリカの“病める社会”の反映なのだろう。〔学習の手引き〕に書かれた規則・校則を、生徒たち、教師たちがどう受けとめているのかまでは明らかに出来なかった。日本における校則・規則の見直しの際の、一つの判断資料として紹介した。

アメリカでは、その後、アトランタ、ロサンゼルスをまわり、11月24日に帰国した。

オリンピックを8ヵ月後にひかえたアトランタは、オリンピック関連施設の建設が急ピッチであった。キング牧師のメモリアル・ホールを訪ねた前後のダウンタウンの様子は忘れがたい。黒人居住区の環境の劣悪さは、目や鼻に強烈に印象づけられた。その後地下鉄（マルタ・トレイン）で北上し、ピーチトゥリー・ストリートなどを散策したが、まさに南北格差を象徴していた。地下鉄の乗客そのものが、ダウンタウンで黒人はほとんど下りてしまい、さらに北上する乗客のな

かに黒人はまばらになって行く。この数カ月後、マーガレット・ミッチェルの生家（タラ屋敷）が火災で消失してしまうが、黒人問題の根深さを実感した。

青木富貴子『「風とともに去りぬ」のアメリカ』（岩波新書）が今年の4月に出版された。「オイル・ショック以降、北部から南部へ帰る黒人の数は年々増え、1980年以降、南部へ帰る黒人の数は、南部を出て行く黒人より10万人多くなっている」（同書、p.195）という。この本を読んだからアトランタへ行っていたら……と思う。

ロサンゼルスで市内見学をしている時、あるハイ・スクールの横を通過した。現地の日本人通訳が、「このハイ・スクールは、ロサンゼルスでもっとも荒れている高校です」と紹介した。毎朝、生徒たちは登校する際、空港にあるような金属探知機を通過させられるのだそうだ。ガンを持ち込ませないためだろう。バスから瞬間的に見えたグランドでは、生徒たちは青いジャージで体育をしていた。スイス、スペイン、アメリカと回ってきて、体育の時間の服装が統一されていたのはこのハイ・スクールだけだった。日本の中・高のジャージを思い出してしまった。

日本でも外国人に学校を視察させる場合、モデル・スクールを選ぶであろうし、前日は全校清掃をしたりする“構え”があるだろう。したがって、上のロサンゼルス（○）のハイ・スクールのような“荒れた学校”を見てみたいというのは、しょせん客人としては無理な話だと思う。

今回の3カ国の視察で、全部で10の学校・施設を視察した。それらが、それぞれの国の教育と学校のありのままの姿をトータルに代表しているとは信じがたいが、その一端は紹介できたのではないかとということで稿を閉じることとする。